

24ヶ月齢短期肥育における飼料給与方法が枝肉に及ぼす影響

○弓削尚之・田中義樹  
(佐賀上場営農セ)

【目的】

肥育牛の出荷月齢早期化は、飼料給与量の削減や肥育出荷回転率の向上により経営の安定が図られる手法である。しかし、通常肥育(約29ヶ月齢出荷)と比較して枝肉成績が劣る場合がある。そこで、24ヶ月齢短期肥育における飼料給与方法が枝肉に及ぼす影響を明らかにする。

【材料および方法】

試験区は、濃厚飼料給与量が肥育前期に多いL区、粗飼料給与量が肥育前期に多いS区を設けた(第1表)。供試牛は2018年7月に平均月齢約8か月で導入した(第2表)。L区は5頭、S区は6頭とし、肥育月齢区分は1~5ヶ月齢を肥育前期、6~10ヶ月齢を肥育中期、11~16ヶ月齢を肥育後期とし、飼料給与計画(第1表)に沿って給与した。また、自由引水および鉱塩を自由舐食とした。敷料はオガクズを用いて適宜交換した。

調査方法については、毎日の飼料摂取量を給与量と残飼の差で算出した。体重は2週間間隔で測定し、24ヶ月齢肥育の枝肉成績は、(公社)日本食肉格付協会の意思枝肉格付結果の枝肉重量、コース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪厚、脂肪交雑、枝肉歩留まりとした。

【結果および考察】

濃厚飼料摂取量はL区、粗飼料の摂取量はS区が多い傾向にあり、ともに前期の摂取量が多かった(第3表)。

各月齢区分・通算のDGは、L区が高く、特に前期のDGが高かった(第4表)。

枝肉成績は、L区のばら厚がS区より有意に厚かった。L区の枝肉重量は483.2kgでS区の434.2kgより49kg大きかった。脂肪交雑はL区8.0、S区8.2と両区に差は無かった。両区の枝肉成績を県平均と比べると、枝肉重量は下回るものの、脂肪交雑が上回る傾向にあった(第5表)。

このことから、短期肥育においては肥育前期に濃厚飼料摂取量を高めることで、脂肪交雑は県平均以上を維持し、枝肉重量が向上することが示唆された。

第2表 供試牛の導入時の生育

区分	平均月齢 (ヶ月)	平均体重 (kg)	肥育開始時DG (kg/日/頭)
L区(5頭)	7.7	272.0	1.16
S区(6頭)	7.6	245.0	1.06

第1表 飼料給与計画

区分	肥育月齢	前期					中期					後期					小計	総計	
		1	2	3	4	5	6	7	8~10	小計	11	12	13	14	15	16			
L区	濃厚飼料	2.5	3.4	5.9	8.7	10.0	30.5	10.0	9.9	10.0	49.9	10.0	9.5	9.5	9.0	9.0	8.5	55.5	135.9
	粗飼料	1.8	2.2	2.0	2.0	1.3	9.2	1.0	1.0	1.0	5.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	6.0	20.2
S区	濃厚飼料	2.5	2.6	3.9	6.0	8.2	23.2	9.9	9.9	10.0	49.8	10.0	10.0	10.0	9.5	9.5	9.0	58.0	131.1
	粗飼料	1.8	2.5	2.6	3.4	1.7	12.0	1.0	1.0	1.0	5.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	6.0	23.0

第3表 飼料摂取量 (kg/頭)

	濃厚飼料			粗飼料		
	前期	中期	後期	前期	中期	後期
L区	27.8	45.0	44.1	9.9	3.6	3.7
S区	22.5	44.5	42.9	12.1	5.0	4.4

第4表 発育成績 (kg/日・頭)

	期間内DG			通算DG
	肥育前期 終了時	肥育中期 終了時	肥育後期 終了時	
L区	1.31	1.18	0.66	0.85
S区	1.19	1.02	0.59	0.72

第5表 枝肉成績

	枝肉重量 (kg)	胸最長筋 面積(cm <sup>2</sup> )	ばら厚 (cm)	皮下脂肪厚 (cm)	歩留 基準値	脂肪交雑 BMS No.
L区	483.2	60.4	8.7	2.9	74.4	8.0 (7,8,8,9,8)
S区	434.2	62.5	7.8	2.7	74.9	8.2 (9,7,6,8,9,10)
	ns	ns	*	ns	ns	ns
平均	458.7	61.5	8.2	2.8	74.7	8.1
県平均(H30年度)	510.6	64.6	8.2	2.5	74.6	7.6